

海洋生物と
ふれあう!

国立大学法人
東京海洋大学
Tokyo University of Marine Science and Technology

マリナクティビティーに
挑戦!

Special Interview

佐々木 剛先生 × 千足 耕一先生 「デキる」につながる海遊び

海の研究を通じた教育に長年携わるお二人の教授に、非認知能力とはどんなものなのか、
また海遊びによって育まれる非認知能力と、子どもとの接し方についてお話を伺いました。





さ さ き つよし
佐々木 剛先生

岩手県宮古市出身。国立大学法人東京海洋大学海洋政策文化学部、水圏環境教区学研究室教授。専門分野は、水圏環境教育学、水産教育学、水圏環境リテラシープログラム

海での活動による ライフスキル獲得は 非認知能力を 高めることに似ている

——先生方の研究について教えてください。
佐々木先生（以下、佐々木） 海や川など「水圏」環境での教育がメインです。子どもたちに海や川をフィールドにした環境教育を行っています。小さなお子さんの体験学習も多いですね。

千足先生（以下、千足） 海辺での自然体験や生活体験が、生きていく力（ライフスキル）の獲得プロセスにどういった影響を及ぼすか、などの研究をしています。また海洋スポーツやレクリエーションそのもののお子さん向け体験学習や、指導者の育成も行います。ライフスキルの獲得は「非認知能力を高めること」と似ています。海での体験が自制心やコミュニケーション能力を培ってくれます。

佐々木 千足先生の海の授業はすごいですね。何より千足先生の精神力や体力の素晴らしさに、引率される学生も刺激を受けてがんばる力を得る。海というフィールドで学生が自然と信頼関係を生み出していく。私も参加させていただいて、強くそう感じました。

千足 何をおっしゃいますか（笑）。僕は流れるのが仕事で、学生や子どもたちは活動の中で自然と成長していきます。しかし、その大前提として、海とか水圏で活動

することを「楽しい」「気持ちいい」と感じていることが大事です。そこから生まれるコミュニケーションは本物で、利害関係はありません。限定された条件の中で自分は何をすべきかを考え、発見して身につける。日常生活に戻ったときにそれを生かし、そしてその力をまた海での活動に生かす。そういうよい循環があつて、成長していくのだと思います。

やんちゃな少年時代 楽しいこと、認められたことが 未来につながる

——先生方はどんな幼少期を過ごして、研究者になられたのですか？

千足 神戸市に育ち、家のすぐ目の前が海だったので、釣りをしたり、遊泳禁止の場所ですり泳いでしまったり（笑）。いつかは航海に出たいとも思っていました。たまたま進んだ体育の分野にアウトドア活動があると知って、「こんな楽しいことをやってメンが食えるならいいな」と（笑）。

佐々木 私は、自然豊かな環境の岩手県宮古市に生まれ育ち、釣りにハマったのがきっかけです。自分でサカナの居場所を探求して、釣ったときの感触に感動しました。当時、三陸海岸では「エラコ」というケヤリムシの仲間を餌にして釣るのが一般的だったので、その見た目から自分は食べられないなかつた。でも、祖父は釣り上げたサカナをおいしそうに食べてくれて、その上、お小遣いまでくれたのです。それですますますハ



ちあし こういち
千足 耕一先生

兵庫県神戸市出身。国立大学法人東京海洋大学海洋政策文化学科教授。専門分野は、海洋スポーツ、レクリエーション。海洋での身体活動に関する研究活動と教育活動を実践



岩手県宮古市で開催している森川海体験交流会。品川区、宮古市、盛岡市、そして台湾の小学生が親子で参加

まるわけです。

当時、小学生で海釣りは学校で禁止されていた。だからズボンの中に釣り竿を隠して釣りに出かけていました。先生は当然気付いているわけですが(笑)。でも、「しょうがないな」と密かに見守ってくれていました。地域の大人たちが子どもたちを温かい目で見守り、大事にしてくれていたんだと自分が大人になってから気付きました。大人が承認してくれる環境があったから、地元への愛着や、自信や誇りなどの「有能感」が高まり、釣りという原体験が今の職業につながっていったのだと思います。

千尾 佐々木先生も私も、「好き」が高じて仕事になったわけですね。

徳々木 ワクワク、ドキドキするような未知なる世界と、そこで獲得したこと、探究したことは、あとあとまで残ります。

千尾 本場にそうですね。最後に残るのは、ワクワクしながら自分で見つけたこと、感じたことです。子どもは情報がないから、親が選択肢を示すことになりませんが、その中から何にワクワクを感じるかは、その子次第です。

徳々木 そうやって自分で選ぶ力を得て、次第に親のサポートなしでもやり抜く力を持つ子へと成長していくんですね。

——非認知能力とはどんなものだと思いますか？

徳々木 生き物はみんな、食べていくためにはどうすればいいんだ、子孫を残すにはどうしたらいいんだ、と必死で生きています。言い換えればすべての生き物に共通する本能であって、それが非認知能力なんだと思います。

千尾 人間の本能、あるいは野性がほとんど

なくなってきたという時代ですよね。野生動物は生き延びることがすべてですが、現代人はそういう部分が削がれてきている。だからこそ、自然や生き物に触れ、観察することで、野性に気付く機会を得ていいのではないかと思います。

非認知能力とは生き物の本能であり野性であることを子どもたちに気付いてほしい

徳々木 たとえば人間だって、高度経済成長期以前は、食べ物を腐らせないようにすることも、衣類を洗濯して衛生を守ることでもライフスキルだった。でも、今は冷蔵庫とか洗濯機とか課題解決の方法がたくさんあり、解決すべき課題を実感する機会が少なくなっています。どんな課題を見つけて解決するか、それぞれの感性を頼りに、自分自身で発見していかなければ生き残れないという流れもあって、非認知能力が注目されてきたのでしょうか。

千尾 世の中の変化に自分たちがどう対応できるか、いかに自分なりの核をもつかが大事だと思っています。ライフスキルもそうですけれど、メンタリティも大事になってきます。私自身、海の活動を通じて、ものの見方や考え方を身につけられる可能性があると思っています。海や川といった水辺で遊ぶということは、常に変化する環境に対応することですからね。





今しかない瞬間を逃さず 子どもが自由に遊べる場を 提供してほしい

——海遊びの際、親は子どもにどのように接すればよいでしょうか？

千足 子どもには、興味をもって、楽しんでほしいですね。興味の対象は人それぞれです。生き物が好き、獲ることが好きなど、一人一人違っていいんです。親御さんは、子どもが自分で見つけた興味を支援するサポーターであってほしいですね。

徳々森 私は本学の近くにある中学校の生徒さんと、この近隣の運河をきれいにするという課題を解決するための授業を行っています。ですが、そこで意識しているのは科学的探究力である思考力・判断力・表現力などの育成です。授業は、中学生を6グループに分けて大学生1人をリーダーとして交え、一緒に学んでいきます。そうすることにより、中学生も指導する大学生も非認知能力を身につけることをねらいとしています。「こういうこと？」と言葉を変換してわかりやすくするなどのやりとりをするなかで「関係性」が生まれていきます。「コミュニケーション」には、こうした「承認」「受容」が大切だとわかります。

千足 親や指導者が海遊びでお子さんと接するときの参考になりますね。「ああしなさい、こうしなさい」と指示するのではなく、「子どもがまず「こうしたい」「やってみよう」という思いに対して、大人はサポートに徹することが大切です。」

徳々森 親子で釣りをするアクティビティのときに、ご家族に釣り竿を1本渡し、お子さんに釣ってもらうのが趣旨でしたが、「お父さんが釣り上げるから、黙って見ていなさい」と釣り竿を取り上げてしまう親御さんがいました(笑)。お子さんの経験を大事にするといいですね。

千足 水圏では、「危険」というキーワードも重要です。「危ないからやらない」ではなく、そもそも自然の中で遊ぶには危険が伴うことを知り、準備をすることが重要です。海の中には足が着かないところがあり、そうだと、ならば泳げるようにならないといけない、息の仕方を十分に学ばないといけないなど、命を失わないように、しっかりと準備する大切さを感覚的にわからせたいですね。そのために幼児はまず手始めに、身近な場所遊ぶのも手です。たとえば本学の近くの、お台場海浜公園やふなばし三番瀬海浜公園の干潟もそうですが、こういった手近な海でも楽しみながら発見できることはたくさんあります。いきなり難しいことに挑戦せず、経験を重ねて徐々に次のステップを促し、自発性を待つことが、その子が自分なりのライフスキルを獲得するために大事なことだと思えます。

徳々森 タイミングも大切です。子どもは小学校3〜4年生ぐらいまでは魚を見るだけでも熱中する子が多いんですが、高学年から中学生くらいになると興味を示さなくなることもあります。子どもが海や川での遊びに興味を持っている瞬間を逃さず、親子一緒に出かけて、子どもが自由に遊べる場を提供していただけるといいですね。

東京海洋大学
Tokai University of Marine Science and Technology

Special Interview

佐々木 剛先生 × 千足 耕一先生

「できる」につながる海遊び



千足先生のカヤックを使用したマリンスポーツ実習。沖縄県波嘉敷島にて実施

非認知能力 を高める

海遊びの本



How to enjoy **Activities**

タイドプールで生き物観察 / ビーチコーミング /
シーカヤック / シュノーケリング /
スキンダイビング / スタンドアップパドル(SUP) /
サーフィン / スキューバ・ダイビング

Special Issue

対談 東京海洋大学教授

佐々木 剛先生 × 千足 耕一先生

「できる」につながる海遊び

Academics

いま、海で起きていること

自然の脅威と危険生物を知ろう

ダイビングとSDGsの関係性

海は最高の
遊び場であり、学び場だ!